

「第3回ケアの倫理カンファレンス」に参加して 野田 浩夫



先日、宇部協立病院で「ケアの倫理」カンファレンスの第3回目が開かれ、温かい雰囲気のもとに様々な真剣な発言がありました。胸を突かれるような発言もありました。

「ケアの倫理」の背景はフェミニズム（女性解放・男女平等）運動にあり、理解は相当難しいものですが、人間がお互いを大切にすることを目指す考えや実践の一環であることは間違いありません。

障害や病気があってケアされなくてはならないからといって価値が低いものとされたり、人生の中で何かを諦めさせられてはいけないというのは当然ですが、人をケアする責任を担うことで（特に女性の医療介護職が）不利になったり、批判されたり、自信を失わされることもあってはならないことも大きな構成要素です。

今回の特徴として僕が感じたことは、これは数十年前の民医連が各地で取り組んだ「全職種参加の症例検討会」が形を変えて帰ってきたものだということです。そのころは、病院に下足番という職種があり、医療専門職からは最も遠いと思われがちだったのに、患者の真実を知っていたのはその人だった、というようなことが語られていました。その症例検討会は、病院規模が大きくなるにつれて次第に廃れ、残っているところでは研修医の激励企画になっているようです。

しかし、今の「『ケアの倫理』カンファレンス」が昔の「全職種参加の症例検討会」の再帰だと僕が思うのは、特定の視点を強く打ち出すことで、職種を超えた平等な場を実現している点で共通しているところです。

かって、それほど職種が分化していないときは「労働と生活の視点から疾患を診る」という立場で全職員が容易に平等になれました。現在は少し難しいかもしれません。

しかし、いま「ケアされる者とケアする者の尊厳を守る」という意味では無条件に全職員が平等になることを発見したのが「ケアの倫理」カンファレンスです。

全職員が平等の立場で人生を語ることができる場を作ることほど、僕たちの組織の未来を保障するものはありません。そういう意味で「ケアの倫理」カンファレンスこそが本質的に未来を作り出しているのです。

なお「倫理」とは何か？という難しい話について一言。それは平等を実現する道筋だというのが、いま僕が考えていることです。



第3回ケアの倫理カンファレンスでは『～命をみんなと背負っていくために～身寄りがなく意思表示できない患者の意思決定支援を考える』をテーマに松本翔子先生から事例を紹介して頂きました。職種を問わず権威勾配のないチームとして一丸となり患者の尊厳を守る医療を提供していくために、心理的安全を守るシステムの構築と職員間の連帯、ケアの倫理を探究し続けることの重要性が話し合われました。

松本先生の命に向き合う率直な言葉が参加者の胸に響きました。共感とともにチーム医療を考える良い機会になりました。

次回開催は2月6日（金）外来より事例提供していただきます。



『支え愛ボックス』の旅

山陽小野田市の旧たんぼ跡地は“セメント町組合活動センター ここあ”に変身しました。ここはこれから地域の様々な活動拠点に変貌して行きそうな地域です。先日、セメント町昭和レトロまつりが開催され組合員さんがバザーを出店。100名以上の方が来店され生活支援価格でたくさんの商品を購入して行かれました。ここでの収益は“ここあ”で開催する食料支援につかわれます。組合員さんより日頃より支え愛ボックスに善意を寄せて下さっている職員の皆さまに感謝の言葉をいただきました。地域福祉室からも深くお礼申し上げます。

